



Title	<図書紹介>小泉和子『船箪笥の研究』
Author(s)	多田羅, 景太
Citation	デザイン理論. 2012, 59, p. 134-135
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53434
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

小泉和子『船箪笥の研究』

思文閣出版 2011年

多田羅景太／京都工芸繊維大学

船箪笥とは、近世海運において北前船に代表される日本海海運や、太平洋側の檜垣廻船・樽廻船に船乗り達が船内に持ち込んで使っていた収納家具のことである。船箪笥についての詳細な調査・研究を最初に行ったのは民芸運動の中心人物であった柳宗悦であり、1961年に発刊された『船箪笥』の中でその成果を紹介している。しかしながらこの『船箪笥』が執筆されてからすでに50年が経過しており、この間に近世海運についての研究も飛躍的に進んだ。

そこであらためて船箪笥の役割と成立経緯、その後の変遷と終焉までを歴史的に考察し、その上で船箪笥のデザインの特徴とその本質を明らかにしたのが本書である。柳宗悦の研究成果を引き継ぎ、さらに著者自身の30年以上に亘る調査・研究成果を多彩な図版を駆使して船箪笥を総合的に捉え直している。特に巻末にまとめられた詳細な基礎資料は今後の研究に大いに資するものであろう。同時に近世海運の成立背景とその展開についても詳しく解説されており、奥行きと広がりを併せ持った内容となっている。

本書によると、船箪笥は懸硯と呼ばれる取手の付いた手提げ金庫と帳箱と呼ばれる帳箪笥の一種、それから半櫃と呼ばれる衣類を入れる小型の櫃に分類される。もっとも船箪笥という呼称は、本来、奉行所において廻船関係の書類を保管していた公用書類箱のことを指し、懸硯、帳箱、半櫃の総称ではなかったが、この船箪笥という呼称を広めたのは他ならぬ柳宗悦の『船箪笥』であることを本書は明らかにしている。

船箪笥の用材には主に櫻が使われ、拭漆や春慶塗で仕上げられる。骨董店などでよく見られる船箪笥には鉄製の重厚な金具が機能的かつ装飾的に施されているが、実際にこのような豪華な装飾が施された船箪笥が使われていたのは北前船に代表される日本海海運であり、その大半は佐渡の小木湊で製造されていた。柳宗悦の『船箪笥』ではこのような豪華形のみが船箪笥として取り上げられているが、本書においては太平洋側の檜垣廻船や樽廻船において主に使用されていた実用形の船箪笥についても詳述されており、当時の船箪笥の実態を的確に捉える内容となっている。

次に、各章の概要にふれておこう。章立ては以下の通りである。

第1章 船箪笥とは何か

第2章 船箪笥の様式形成と豪華形の出現

第3章 船箪笥の地域的差異と産地

第4章 豪華形船箪笥と北前船

まず第1章では、船箪笥の特徴について述べている。まず懸硯、帳箱、半櫃といった船箪笥の種類を紹介し、それぞれの形態的な側面を解説している。次に船箪笥の存在基盤であった江戸時代の海運による流通機構について、幕藩体制の成立期、成長・安定期、解体期の三期に分けて解説している。さらに、船が海難にあった際に、最寄りの浦で船頭が浦役人から受ける海難証明書である浦証文を基に、船箪笥が誰によってどのように使われ、どのような役割を担っていたかを考察し、最後に従来用いられていた船箪笥の呼称について再検討を行っている。

次に第2章では、船箪笥の様式がいつ頃ど

のようにして形成されたか、そしてその後どのような変遷を経て、豪華形船簾笥の出現へと繋がっていったかを時間軸に沿って考察している。具体的には、船簾笥の底や抽斗の裏などに書かれた、持主や製作者の名前や屋号、購入日などを基に分類した資料から、懸硯、帳箱、半櫃がそれぞれいつ頃どのようにして形成されていったかを分析し、次にそれぞれの変遷過程から豪華形が出現した時期を割り出している。

本章では著者が長年に亘って全国津々浦々で収集した数多くの船簾笥に関する資料が、船簾笥の様式の変遷を明らかにするデータとして活用されており、それらは船簾笥が江戸時代の海運による流通機構とともに発展を遂げ、その後衰退していったことを如実に物語っている。

第3章では、船簾笥の様式の地域的差異とその産地について取り上げている。まず船簾笥の豪華形と実用形の生産地域分布を分析し、豪華形船簾笥は北陸地方を中心としており、実用形は全国的に分布していることを指摘している。さらに、船簾笥の産地として広く知られる佐渡（新潟県）の小木、出羽（山形県）の酒田、越前（福井県）の三国は、豪華形船簾笥の産地であることを突き止め、実用形の船簾笥の産地として泉州堺、大坂、江戸を取り上げている。これにより、江戸時代の海運による流通機構の成立期に、泉州堺で作られた実用型の船簾笥が廻船によって全国に広がり、やがて18世紀中期から末にかけて佐渡を中心とした日本海側で独自の展開を経た後、豪華形船簾笥の誕生へと繋がったことを明らかにしている。

第4章では、第3章で取り上げた豪華形船簾笥の誕生の背景をさらに深く考察している。本章では、日本海海運の北前船に代表される買積船と、太平洋側の檜垣廻船・樽廻船に代

表される運賃積船の経営形態の違いによるそれぞれの利潤の差を明らかにし、利潤が大きかった買積船にとって豪華形船簾笥がどのような意味を持っていたかを追求している。そして最後に日本海海運の発達と豪華形船簾笥の展開との相互関係を基に船簾笥の本質について考察し、論考を締めくくっている。

本書における最大の意義は、柳宗悦が『船簾笥』を発表して以降、長らく空白期間が続いている船簾笥の研究を引き継ぎ、近世海運の歴史に照らし合わせながら船簾笥の存在意義を新たな視点で読み解いた点にある。また、蓄積された調査結果を基に、船簾笥のデザインの特徴とその本質を明らかにした点で今後の民具研究においての大きな意味を持つといえるだろう。

なお、著者も本書の冒頭で触れているが、船簾笥のような民具を歴史研究の対象として扱うのは容易ではない。このようなモノ資料を歴史史料として扱う方法論の構築例としても一読の価値がある。

